

第5章 転入者による集落活動への参加と 共用空間の利用管理

5-1 はじめに

(1) 本章の目的

本章では、前章で明らかになった課題を踏まえ、人口増加し存続し集落社会を再編した集落において、転入者による祭事行事などの集落活動への参加に着目し、転入者が共用空間の利用管理に与えた影響を明らかにする。

(2) 対象地の概要

本章において対象とする瀬相集落は、奄美大島南部に位置する鹿児島県大島郡瀬戸内町に属し、鹿児島市より南へ約450kmにある(図5-1)。

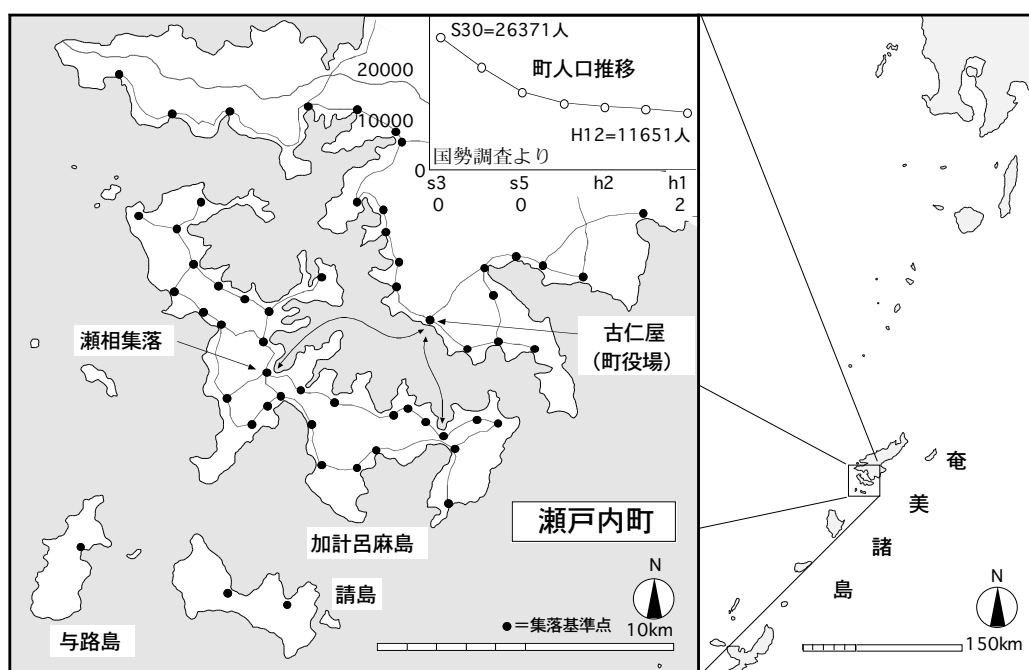


図 5-1 瀬戸内町の位置と人口推移 (国勢調査)

本章では瀬相集落における人口増加の時期として、カーフェリーの就航した昭和52年以降と設定した。よって本章で扱う『転入者』とは、「昭和52年以降に集落において居住を開始し、現在も居住を続けている人」とした。

(3) 調査分析の枠組みと方法

本章は2回の現地調査にもとづき構成した（表5-4）。

表 5-4 調査の概要

調査項目	共用空間の利用管理の変化	住民の居住歴	転入者の集落活動への参加
調査方法	ヒアリング調査	アンケート調査	ヒアリング調査
調査方法	直接訪問	直接訪問による配付・回収	直接訪問
調査期間	同左	2001年6月26日～30日	2001年9月10日～22日
対象者	区長より紹介を受けた住民	調査期間中に居住が確認できた成人43名	住民の居住歴の調査により把握した転入者24名
有効回答数	8	33 (76.3%)	24 (100%)

本章では、分析の対象として、集落活動を扱う。集落活動とは、集落社会による常会や行事の準備などと、祭事行事や共同作業などの共用空間の利用管理とを言う¹⁾。

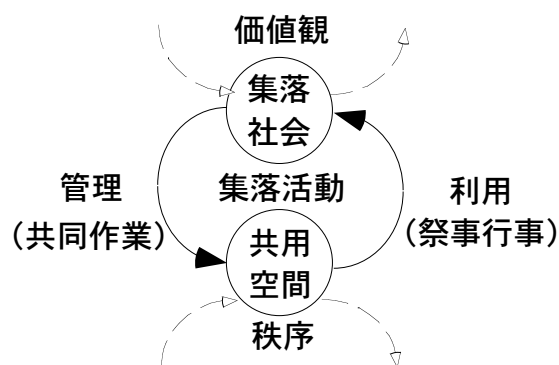


図 5-5 集落活動と集落社会、共用空間の利用管理との関係

本章の構成としては、まず、昭和52年と平成12年における集落活動の変化を整理

する。次に、転入者のプロフィールを整理し、集落活動への参加状況との関係を明らかにする。以上から、集落社会を再編した集落において転入者が共用空間の利用管理に与えた影響を明らかにする。

5-2 集落活動の変化

(1) 集落活動の変化

集落外での居住経験がない住民で、かつ各時代の事情に詳しいと思われる住民を区長より紹介を受け、協力を得られた 8 名に対してヒアリング調査をおこなった。このヒアリングをもとに昭和 52 年と平成 12 年 9 月現在とを比較することで人口増加による集落活動の変化を集落社会・共用空間・利用管理から整理する。(表 5-6)

1) 集落社会

人口の減少と高齢化により部落会はほぼ無くなっていた。転入者の区長の呼びかけにより部落会にかわり全世帯が参加する自治会が発足した。これは平成 10 年に認可地縁団体制度²⁾の適用を受けた。発足にあたり選出する必要がある自治会役員 16 名³⁾のうち 9 名は転入者である。

世代別性別組織もほとんど解体していたが、豊年祭⁴⁾の企画・運営を担うために豊年祭実行委員⁵⁾が一時的に組織されるようになった。当初は実質一人が作業をしていたが、自治会活動が活発になったころを境に、青壮年が声を掛け合うことで活動を行うようになったという。また、ユリウウティ⁶⁾も一時的に組織されるようになり、豊年祭実行委員と同時期から盛んに集まるようになったが、転入者の参加は少ない。

また、昭和 56 年に親睦を目的とした老人会である夕岳会⁷⁾が発足している。

1) 利用管理

自治会発足により共有空間⁸⁾が明確化され、自治会としてこれを管理する必要が生じた。そこで、自治会は美化作業⁹⁾を自治会活動とし、原則全員参加として定期的に行うこととした。

豊年祭は高齢者が集まり会食をする程度であったが、人口増加とともに集落内外からの要望を受け徐々に盛んに行われるようになった。舞台となる共用空間¹⁰⁾が美化作業により清掃されるようになったこと、企画・運営を担う組織の活動が活発になったことなどの条件が整い、豊年祭は一層盛大になったと言われている。

権現参り¹¹⁾は常に行われているが、少数の集落住民のみが集まる程度である。

1) 共用空間

共有空間については区長の私有という形をとっていたために、区長を交代する際に生じる法手続と税支出が、大変な負担となっていた。自治会発足後は自治会の所有へと変わった。

美化作業により公民館前のトネヤやアシャゲなどの共有空間をはじめ、道路や河川を含めた共用空間もおおむね清掃されるようになった。

表 5-6 集落活動の変化

			S52 当時	現在	備考
集落 社会	自治会		無	有	集落の組織は停滞していたが、平成10年に自治会が発足して以降は比較的活発になった
	世代別 性別 組織	青壮年団	無	有 (豊年祭実行委員)	豊年祭のために一時的に組織されるようになった
		婦人会	無	有 (ユリョウティ)	各行事の際、宴の準備のために一時的に組織されるようになった
		老人会	無	有 (夕岳会)	昭和56年に町に登録し、親睦を目的とした活動を行っている
利用 管理	祭事 行事	豊年祭	ほぼ無	有	集落内外からの要望を受けて徐々に活発になった(平成13年には120人ほどを招待した)
		権現参り	有	変化なし	常に少人数で行われている
	共同作業	美化作業	ほぼ無	有	自治会の活動となり、定期的に行われるようになった
共用空間			荒廃	清掃される	美化作業により清掃される

(2) 因果関係の整理

ここでは、集落活動の変化を集落社会、共用空間、利用管理のそれぞれの因果関係として図 5-7 のように整理した。

昭和 56 年に結成された老人会と常に行われてきた権現参り以外の変化は、平成 10 年の自治会発足以降の変化である。共有空間の所有の問題をきっかけに、転入者の区長が働きかけ、転入者の多くが役員を引き受けることで自治会が発足した。自治会が共有空間を所有することで、美化作業を行うこととし、祭事の舞台である共有空間がきれいに保たれるようになった。住民同士が顔を合わせる機会が増え、転入者を含め共有空間に対する意識や祭事行事に対する意識が高まり、次第に豊年祭も活発になった。豊年祭が活発になることで、世代別性別組織に相当する豊年祭実行委員やユリウティが一時的ではあるが組織されるようになった。また、美化作業も次第に共有空間以外の共用空間も清掃されるようになった。

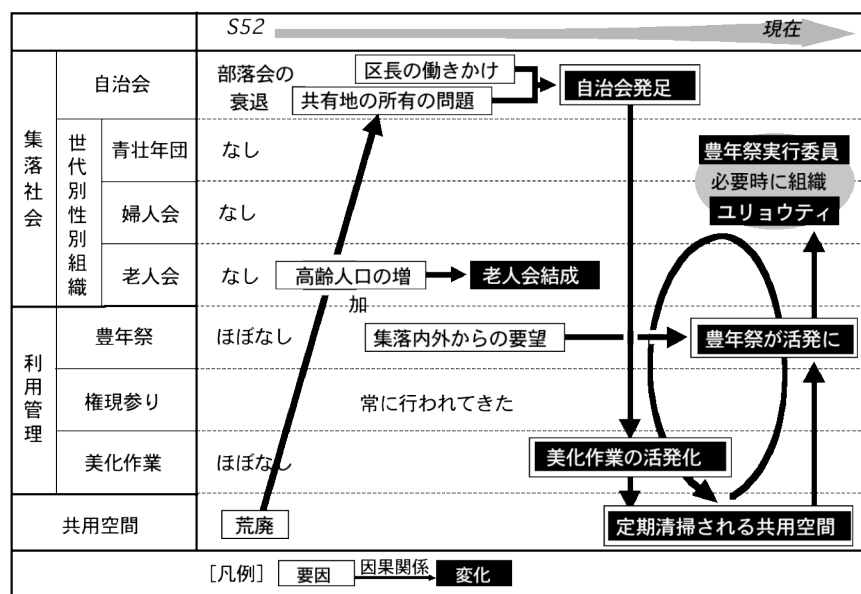


図 5-7 因果関係の整理

5-3 転入者のプロフィール

ここでは、転入者の集落活動への参加状況を把握するために、まず転入者のプロフィールを把握する。調査期間中に居住が確認できた43名の成人を対象に行った転入年・性別・年齢（調査日時と転入時）・転入経緯¹²⁾・土地建物の所有・転入のきっかけについてのアンケート調査により、33名の転入者が確認できた。この調査では、14世帯24名から有効回答（72.7%）を得た。調査結果を表5-8に示す。

表5-8 転入者のプロフィール

番号	転入年	性別	年齢		転入経緯		所有		転居のきっかけ
			現在	転入時	個人	世帯	土地	建物	
1-1	H8	男	60代	60代	帰村	帰村	○	○	定年と子の独立を機に・ずっとシマに帰るつもりで計画を立てていた
1-2		女	60代	50代	U				
2	H7	男	70代	60代	I	I	●	●	会社が倒産・震災で家を失った
3-1	H7	男	70代	60代	帰村	帰村	○	○	父の体調が悪くなったからいつか帰ってくるつもりでいた
3-2		女	70代	60代	帰村				
4-1	H6	男	70代	60代	U	U	●	○	息子が家業を継がないと言った
4-2		女	70代	60代	I				
5	H6	男	40代	30代	帰村	帰村	親		離婚
6	H6	男	40代	40代	帰村	帰村	親		震災にあった・弟の説得
7-1	H6	男	50代	40代	U	U	○	○	危険な仕事で嫌だった・島に帰って民宿でもやろうと思った
7-2		女	40代	40代	U				
8-1	H4	男	30代	30代	町内	町内	○	○	親の体調が悪くなり近くに住むことに・アパート暮らしに疑問
8-2		女	30代	20代	町内				
9-1	H3	男	50代	40代	帰村	帰村	● (○)	● (○)	父の体調が悪くなったので近くに住んで介護することにした
9-2		女	40代	30代	町内				
10	S61	男	70代	60代	帰村	帰村	○	○	母が病気になりシマに戻ることに
11-1	S61	男	40代	20代	町内	町内	●	○	結婚を機に新居を構えることにした
11-2		女	30代	20代	U				
12-1	S57	男	40代	30代	町内	町内	●	●	結婚を機に新居を構えることにした
12-2		女	40代	20代	町内				
13-1	S56	男	80代	60代	帰村	帰村	○	○	死ぬのはシマかなと思った
13-2		女	70代	50代	I				
14-1	S52	男	50代	20代	U	U	● (○)	● (○)	会社の依頼により島で事業をはじめめるために
14-2		女	40代	20代	U				

凡 例 等	[転入経緯]	[所有]	[転居のきっかけ]
	帰=帰村	○=所有	「前居住地より転居することになった
	U=Uターン	●=借地、借家	きっかけは何ですか？」に対する回答
	町内=町内転居	*転入時の状態、カッコ内は	
	I=Iターン	その後の転居により変わったもの	

5-4 転入者の集落活動への参加

(1) 対象とする集落活動の設定

ここでは、転入者の集落活動への参加状況から、転入者が共用空間の利用管理に与えた影響を明らかにするために、5つの集落活動を設定し（表 5-9）、昨年一年間の5つの集落活動への参加状況とその理由に関するヒアリング調査を行った。

表 5-9 5つの集落活動と集落社会、利用管理との関係

		集落活動
集 落 社 会	自治会	常会
	豊年祭実行委員会	行事の準備
	ユリョウティ	
	老人会	—
利 用 管 理	豊年祭	豊年祭
	権現参り	権現参り
	美化作業	美化作業

(1) 5つの集落活動のそれぞれの特徴

参加状況を男女別に集計すると、常会や美化作業で大きな差が生じた。（図 5-10）

1) 自治会の常会

半数 12 名が「参加した」と回答している。「時々参加した」を加えると全世帯から 1 名が参加している。男女別にみるとほとんどが男性である。部落会の慣習が残っており、世帯の代表者が参加すれば一応の責任を果たしたと考えられている。

2) 行事の準備

「参加した」「時々参加した」をあわせると 17 名で 2/3 程度の参加率となる。ユリョウティは一年で幾度も組織されるため、女性では「時々参加した」が 3 名見受けられた。

3) 豊年祭

22名とほぼ全員が参加している。集落外からも多くの出席者を招くため、参加意識が高いと考えられ、当日の都合が悪い者以外は参加している。

4) 権現参り

全項目でもっとも少ない8名の参加である。旧暦の9月9日に行われるため平日となることが多く、馴染みがないため参加がえられない。

5) 美化作業

15名が参加したと回答している。自治会の常会と似て男女別にみるとほとんど男性である。「時々参加した」という女性が6名と多いことが特徴的である。基本的に世帯の代表者が参加すればよいとの意識が強いが、行事の前など人手が必要な時には女性も比較的積極的に参加していると言える。

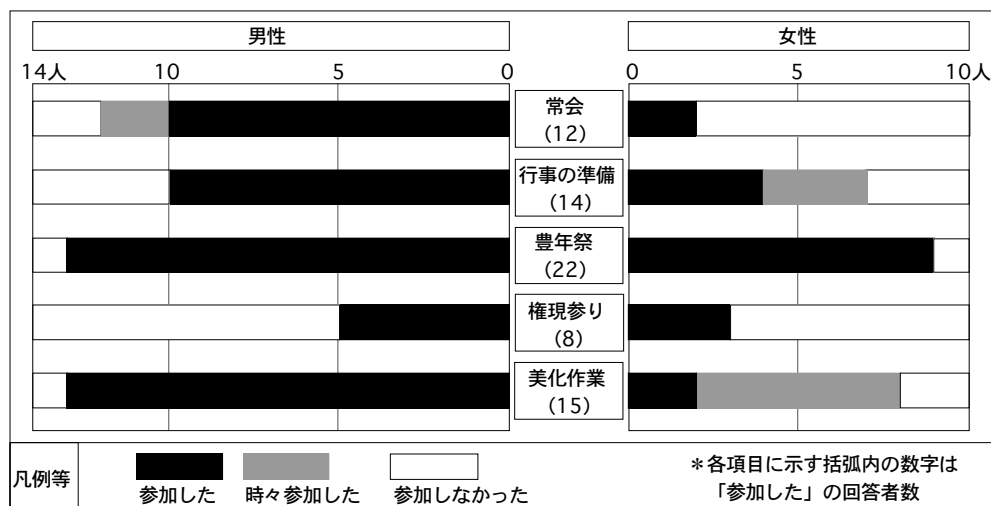


図 5-10 男女別の参加状況

	参加	時々参加、不参加
常会	・集落に住んでいるからには当然 ・世帯の代表者として	・仕事があると出られない ・夫が参加しているから ・出ても意味がない
行事の準備	・出なければ成立しない ・若い衆で声を掛け合っている	・子育てが大変 ・時間がなかった ・敬老なので
豊年祭	・瀬相の結束をみせたい	・娘の運動会(名瀬)と重なった ・仕事があると出られない
権現参り	・親がやるのを見ていた ・平日でも時間がある	・馴染みがない ・平日は無理
美化作業	・世帯の代表者として ・当然と思っている	・夫が出ているから ・休日の早朝は負担が大きい

図 5-11 参加状況の理由のコメント

(3) 参加状況の類型化

5つの集落活動から、ほぼ全員が参加している豊年祭を除外し、その参加状況により転入者の集落活動への参加状況の特徴的な5つに類型した(図5-12)。

各類型の特徴と意識を以下に整理する。

1) 積極参加型

すべての活動に参加しているタイプである。世帯の代表として当然であるという意識が強い。さらに集落の伝統的な行事についての認識も高く、平日に少数で行われる権現参りにも参加している。

2) 一部除き積極参加型

ほぼすべての活動に参加しているが、権現参りには参加していないタイプである。積極参加型と同じく責任感を感じて参加しているが、「仕事があるために平日の行事への参加は無理」などの理由で権現参りには参加しない。

3) 自治会活動集中型

常会や美化作業などの自治会活動には参加するが、行事の準備には参加しないタイプである。豊年祭には現在では敬老感謝の意味もあり、敬老者(73歳以上)は本来その準備にあたらないうことになっている。また体調が悪いこともあり他の活動にも消極的であることが多い。

4) 実作業貢献型

常会には参加しないが実際の作業にはおおむね参加するタイプである。「仕事の都合上」や「夫が参加している」などの理由で常会には参加していない。また、「出ても意味がない」や「情報や発言権の偏りを感じる」などの否定的な意見も聞かれた。しかし、その他の活動には比較的積極的に参加している。

5) 消極型

すべての活動にあまり参加しないタイプである。「夫が代表として参加している」、「仕事や家事で余裕がない」、「体調が悪いので断っている」、「参加したくない」など様々な理由で参加には消極的である。また活動内容の認識自体が低い場合も多い。

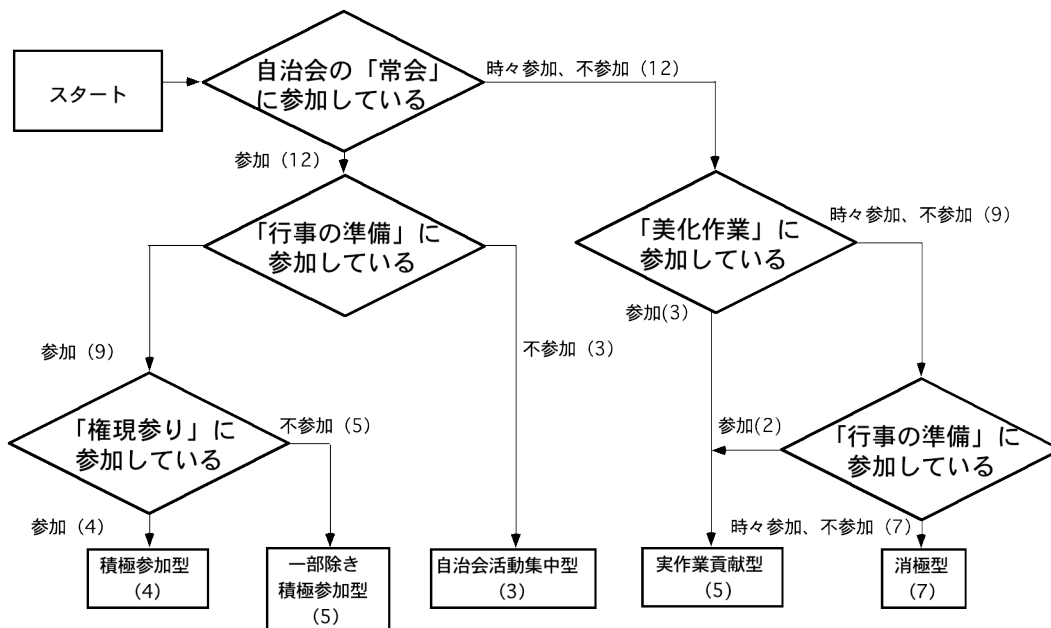


図 5-12 転入者の集落活動への参加状況の類型フロー

(4) 参加状況の類型と属性

参加状況の類型と属性との関係を整理した（表 5-13）。これにより、参加状況は転入者の属性（転入経緯、年齢、性別）と密接な関係があることがわかる。以下に詳細を示す。

1) 積極参加型「帰村-65 歳以上-男性」

全員の転入経緯が帰村である。また、全員が 65 歳以上であり、男性の割合が高く、役職を持つ者や農作業をしている者の割合も高い。高齢の帰村者は定年後の転入であることが多く、比較的時間に余裕がある。集落の事情や慣習を知っていることや、集落内に親の代からの知人が多いことも影響して、すべての活動に積極的に参加している。また、集落の作法が色濃く残る権現参りにも積極的に参加している。

2) 一部除き積極参加型「町内転居-45 歳前後-男性」

ほとんどの転入経緯が町内転居である。平均年齢が 46 歳と全類型でもっとも低く、男性の割合が高い。また、役職を持つ者が多いが農作業をしている者はほとんどいない。町内転居者は比較的生活の利便性を求めて転入した若年層だが、世帯主は責任を理解し集落の行事を盛り上げようという意識を持って積極的に参加している。しかし、時間の制約や古くからの慣習を知らないことで権現参りには参加していない。

3) 自治会活動集中型「敬老者-男性」

全員が 73 歳以上の敬老者の男性である。また、役職を持つ者や農作業をしている者の割合が高い。転入経緯は様々である。敬老者は実際の作業には参加しないが年配者として役職を受けることが多い。

4) 実作業貢献型「帰村-壮年層男性、U ターン-女性」

帰村者の男性とUターン者の女性が多い。平均年齢が低く、役職を持つ者はいない。常会にはあまり参加しないのは、壮年層の帰村者の男性は親が出ている、Uターン者の女性は夫が出ているなどの理由である。しかしどちらも幼少をこの地域で過ごした経験から親しみを抱いており、実際の作業には参加し貢献している。

5) 消極型「ほとんど女性」

ほとんどが女性であり、年齢は様々である。役職を持つ者はほとんどいない。Iターナー者の女性は高齢であるなどの理由で多くの活動に消極的になっている。町内転居の女性は若年層で、家事や仕事による負担があり活動に消極的である。また、集落の慣習から女性の多くは常会に参加しないことで住民との関係が薄く、活動に対する発言権が少ないことも他の活動に消極的になる要因となっている。

表 5-13 参加状況の類型と属性の関係

	番号	転入形態	年齢	平均	性別	転入年	役職	農作業
積極参加型 (4)	1-1	帰村	65	73	男	H8	○	○
	3-1	帰村	72		男	H7	○	●
	3-2	帰村	70		女	H7	●	●
	13-1	帰村	85		男	S56	○	○
一部除き積極参加型 (5)	8-1	町内転居	39	46	男	H4	○	●
	9-2	町内転居	48		女	H3	●	○
	11-1	町内転居	42		男	S61	○	●
	12-1	町内転居	49		男	S57	○	●
	14-1	Uターン	50		男	S52	○	●
自治会活動集中型 (3)	2	Iターナー	75	75	男	H7	●	●
	4-1	Uターン	73		男	H6	○	○
	10	帰村	77		男	S61	○	○
実作業貢献型 (5)	1-2	Uターン	60	49	女	H8	●	●
	5	帰村	42		男	H6	●	○
	6	帰村	49		男	H6	●	○
	7-1	Uターン	55		男	H6	●	●
	11-2	Uターン	39		女	S61	●	●
消極型 (7)	4-2	Iターナー	75	55	女	H6	●	●
	7-2	Uターン	49		女	H6	●	●
	8-2	町内転居	31		女	H4	●	●
	9-1	帰村	53		男	H3	●	○
	12-2	町内転居	48		女	S57	●	●
	13-2	Iターナー	79		女	S56	○	○
	14-2	Uターン	46		女	S52	●	●
注釈 および 凡例	・各平均値は少数点以下 第一位を四捨五入 ・年齢は 単位＝歳			・役職 ○＝役有 ●＝役無		・農作業 ○＝している ●＝していない		

5-5 共用空間の利用管理に与えた転入者の影響

(1) 転入者が集落活動に与えた影響

ここでは、5-2 で整理した集落活動の変化と、5-4 で明らかにした転入者の集落活動への参加状況と属性との関係にもとづき、転入者が集落活動に与えた影響を明らかにする。(図 5-14)

1) 条件の充足・常会への参加

世帯主である転入者の多くが常会に参加しており、彼等が役員を引き受けた。これにより転入者が自治会の発足に必要な条件を満たした。積極参加型、一部を除き積極参加型、自治会活動集中型が常会に参加している。

2) 労働力の提供

実際に作業がはじまると、夫が常会に出ているために参加しない転入者の女性や、常会に否定的であった転入者の実質参加型も参加した。これにより転入者は作業に必要な労働力を提供した。

3) 青壮年層の活動

一部を除き積極参加型である転入者の青壮年層が中心に、次第に声を掛け合い活動し、豊年祭実行委員という役割を担った。これにより、盛大な豊年祭がおこなわれうるようになった。

4) 豊年祭への全員参加

豊年祭には、消極型も参加することで豊年祭を盛り上げた。

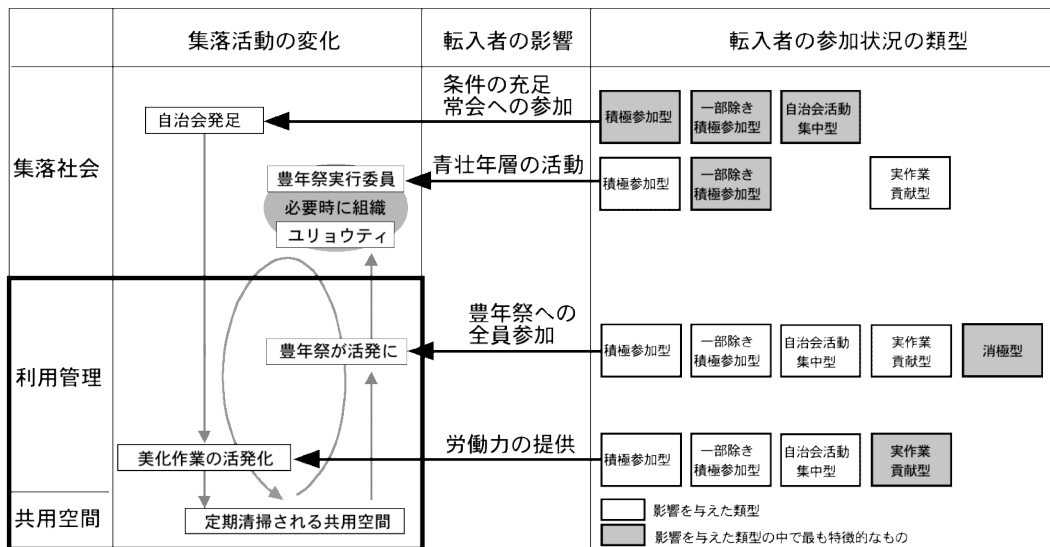


図 5-14 転入者が集落活動の変化に与えた影響

(2) 共用空間の利用管理への影響

以上から、集落社会を再編したことをきっかけとし、転入者がそれぞれの立場で集落活動へ参加することで、祭事行事や共同作業が活発になり、結果として共用空間の利用管理に好影響を与えたことが明らかになった。

5-6 まとめ

(1) 結果の要約

本章では、人口増加し集落社会を再編した鹿児島県大島郡瀬戸内町瀬相集落において、その実態を明らかにし転入者が共用空間の利用管理に与えた影響を明らかにした。結果は以下の通りである。

①昭和 52 年と平成 12 年における集落社会の比較を通して集落活動の変化を明らかにした。また、集落活動の変化を集落社会、共用空間、利用管理の因果関係として整理した。

②転入者のプロフィールを整理し、5つの集落活動への参加状況と属性（転入経緯・年齢・性別）との関係を明らかにした。

③集落活動の変化と、転入者の集落活動への参加状況から、転入者が集落活動に与えた影響を明らかにした。

④以上から転入者の共用空間の利用管理への影響として次の2点が明らかになった。

- ・集落社会を再編したことがきっかけとなり、祭事行事や共同作業などの集落活動への転入者の参加を促し、共用空間の利用管理を活発化させたという因果関係が考えられること。

- ・転入者は、転入経緯や年齢、性別により、常会、美化作業や豊年祭などのそれぞれがそれぞれの集落活動に参加することで、集落活動全体を支え、そのことが共用空間の利用管理に好影響を与えたこと。

5-7 仮説の潜在的可能性の検証

(1) これまでの成果の整理

離島地域における集落環境の利用管理の実態を把握するために、まず、4章では、転入により人口増加した事例である鹿児島県鹿児島郡十島村小宝島を取り上げ、世帯が増加することにより、これまでとは異なった近代的生活様式を流入し生活様式が混在する実態を調査分析した。これにより、集落環境の利用管理を続けて行くための課題として次の2点が明らかになった。①近代的生活様式の経験を有している転入者に伝統的生活様式を伝えて行くこと②集落社会において共同意識を再構築していくこと。

これらの課題を踏まえて、第5章では、転入により人口増加し集落社会を再編した鹿児島県大島郡瀬戸内町瀬相集落を取り上げ、転入者による祭事行事などの集落活動への参加に着目し、転入者が共用空間の利用管理に与えた影響を明らかにする調査分析を行った。これにより、次の2点が明らかになった。①集落社会の再編がきっかけとなっていること②転入者は年齢・性別、転入経緯の違いなどに応じて、それぞれに集落活動に参加し、共用空間の利用管理に好影響を与えていること。

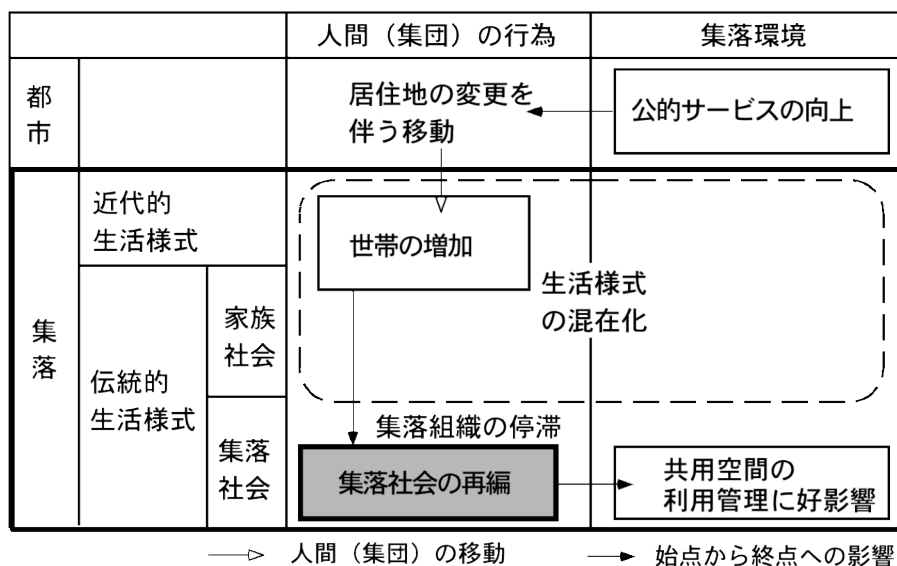


図 5-15 4章と5章の成果の整理

(2) 仮説の潜在的可能性の検証

中心の都市から概ね 30km 圏外に位置する離島地域においては、転入者に期待せざるを得ない状況と考えられるので、以上の実態把握からは、近代的生活様式の経験を有する転入者を受け入れながら集落を存続しつつ、集落環境の利用管理も継続していくためには、転入者が共用空間の利用管理の担い手になり得るといふ潜在的可能性があると言える。

つまり、設定した『転入者は集落環境の利用管理の担い手になり得る』という仮説は、祭事行事の舞台となる共用空間の利用管理において検証できた。

<補注>

- 1) 加藤(1999)は、①集落の共同空間、②運営組織、③祭りと年中行事、の実態調査により集落に継承される「共同性の社会・空間構造」としてあきらかにしている。本章ではこの視点を参考とした。
- 2) 1991年、地方自治法の改正により「認可地縁団体制度」が創設された。これにより地縁団体が法人格を取得することができ、地縁団体が不動産を所有することが可能となった。
- 3) 瀬戸内町(1991)において、認可地縁団体制度を用いて法人格を取得する場合、役員を16名選出することが条件となっている。
- 4) この地域でもっとも盛大に行われる祭りである。現在では旧暦8月16日前後の週末を利用して行っている集落が多い。相撲をとり、八月踊りや宴をする。
- 5) 豊年祭の準備のために組織される男性の集まりである。以前の青年団に相当する。招待状の送付や当日の進行などをおこなう。
- 6) ユリョウティは、婦人会に相当する。「寄り合ってやりましょう」との意味からこう呼ばれている。行事や祭事ときに婦人が宴の準備にあたる。
- 7) 町に登録する際に命名された。60歳以上の者が会員の対象となる。
- 8) 共有空間にはトネヤ(休憩所)とアシャゲ(炊き出し場)、ウフミヤ(土俵)と共有畑があるが、共有畑は利用されずに荒廃しているため、本章では特に断りの無い限り共有空間とはトネヤとアシャゲ、ウフミヤをさすこととする。
- 9) 毎月第二日曜日の朝に行われる。必要に応じて清掃箇所が決められる。私有地であっても共同性が高い箇所は清掃することもある。
- 10) 本章では、共有空間であるトネヤやアシャゲ、ウフミヤをはじめ、権現様やゲートボール場、公民館など共同利用される場所をさす。
- 11) 旧暦の9月9日、権現様を参拝し八月踊りや宴を行う。「クガツクニチ」「ティラマイリ」とも呼ばれている。
- 12) 転入者の出身地と前居住地との関係を「転入経緯」として、松本ら(1994)を参考として次の4つに整理した。①帰村：出身地が瀬相であり前居住地が集落外である者、②Uターン：出身地が瀬相以外の町内の集落であり前居住地が町外である者、③町内転居：出身地が瀬相以外の町内の集落であり前居住地が町内である者、④Iターン：出身地が町外である者。

<参考引用文献>

- (1) 加藤仁美「集落における共同性の社会・空間構造と環境管理」、日本建築学会計画系論文集、第 518 号、p173～p180、1999. 4
- (2) 瀬戸内町「自治会規約作成資料」、1991
- (3) 松本通晴、他 編「都市移住の社会学」、世界思想社、1994. 6
- (4) 丸山弘敏「人口流入過程における『集落構造』の変化と転入者の役割～鹿児島県大島郡の瀬相集落を事例として～」早稲田大学修士論文、2002. 2
- (5) 長谷川昭彦「近代化のなかの村落、農村社会の生活構造と集団組織」、日本経済評論社、1997. 2

